

### <フォーラム>第2回例会（シンポジウム） 「沖縄で研究すること 沖縄を研究すること の意味」開催報告：第2回例会（シンポジウ ム）・趣旨説明

小原, 丈明 / KOHARA, Takeaki

---

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

55

(開始ページ / Start Page)

59

(終了ページ / End Page)

60

(発行年 / Year)

2023-03-20

## 第2回例会（シンポジウム）・趣旨説明

小原 文明

2022年度の第2回例会（シンポジウム）は2022年12月17日（土）に、「沖縄で研究すること、沖縄を研究することの意味」と題して開催した。コロナウイルスの感染状況も含め、諸般の事情により、残念ながら、今回のシンポジウムもオンライン形式での開催となった。

今回のシンポジウムにて沖縄をテーマとした趣旨は大きく分けて2つの理由から説明できる。第1に、2022年は沖縄の本土復帰50年を迎える年であり、現在に至る戦後の日本を見つめなおす意味でよい機会であると考えたからである。沖縄の本土復帰50年に関わるイベントは沖縄県を中心に多数開催され、また、さまざまな学問分野の学会においても沖縄に関する企画は開催されたが、沖縄研究自体の意味を問う、また再考する企画も必要と考え、本シンポジウムを企画した次第である。

また、第2に、本学会の会員であり、本学地理学科の中俣均先生が2022年度をもって本学を退任されることも本シンポジウム開催の理由である。中俣先生は沖縄を主要な研究対象地域とされており、長きにわたって沖縄研究に従事されてきた。1984年に本学着任後は沖縄文化研究所（以降、沖文研と表記）にも在籍され、他の学問分野の研究者とともに沖縄研究に取り組んでこられた。本学の沖文研は、沖縄が本土復帰を果たした1972年に創設されたので、こちらも創設50周年を迎えたことになる。このように半世紀にわたって活動してきた沖文研は日本における沖縄研究の拠点の一つといえよう。なお、中俣先生はその沖文研の所長を1998年から2000年にかけて、また、2015年から2021年にかけて務められていることから、同先生は研究面や教育面、そして実務面から沖縄研究に携わってきたといえる。このように、2022年度で中俣先生が退任されるのを機に、同先生が長らく取り組んできた沖縄研究について、本学会でも考えてみたいというのが本シンポジウムを開催するもう一つの理由である。

本シンポジウムにおいては、前半では本シンポジウムのテーマに則して、中俣氏と長谷川均氏（国士舘大学文学部）、柴田健氏（地理教育研究会）、崎浜靖氏（沖縄国際大学経済学部）の4人の方にご講演いただき、そして後半では、さらにテーマに則してパネルディスカッションを行った。

前半の講演では、中俣氏には人文地理学の研究者の立場から、長谷川氏には自然地理学の研究者の立場から、柴田氏には研究者ならびに地理教育、実践活動の立場から、そして崎浜氏には現地在住の研究者の立場からそれぞれご講演いただいた。各氏の講演内容は以降の論を参照していただきたい。そして、後半のパネルディスカッションでは各氏の講演内容を踏まえつつ、沖縄研究のきっかけについてや、面白さや難しさ、特徴や独自性、他地域との関係性、自身にとっての沖縄研究とは何かなどについて意見を出し合ってもらった。

各氏の講演やパネルディスカッションを通じて、沖縄研究の面白さや独自性などが聴衆に伝わるとともに、研究者目線からみた沖縄の変化についても理解できたかと考える。そして、本シンポジウムのテーマである「沖縄で研究すること、沖縄を研究することの意味」については、シンポジウムの参加者全員が共有できたかどうかは分からないが、それぞれが何らかの意味を導き出すことができたか、あるいはそれを考えるきっかけになったかと思われる。

最後に、本シンポジウムを担当した者としての雑感や反省を記す。今回のシンポジウムには48名の参加があった。地域を絞ったテーマであったためか、あるいは開催時期や広報の問題なのか、想定よりも参加者が少なかった印象である。昨年度のシンポジウムの際にも同様のコメントを記したが、集會担当者としては多くの方に参加してもらえる例会を開催するよう心掛けたい。また、パネルディスカッションの方法についても改善の余地があると考えられる。パネルディスカッションでは、まずはパネラー

間でディスカッションを行うため、パネラー以外の参加者である聴衆が能動的に参加するタイミングが難しく、またその時間を確保するのが困難である。今回のパネルディスカッションでも聴衆に質問や意見を出してもらう機会を設けたが、どうしても多くの意見を吸い上げることができなかった点は改善の余地があると考え。今後は、パネルディスカッションよりも前の段階、つまり前半の講演の段階で聴衆からの意見や質問を収集する方法を採り入れる

などの改善を図っていきたい。また、オンライン形式ではなく、対面形式でシンポジウムを開催できるようになれば、状況も変わってくるかと考える。

シンポジウムに限らないが、本学会の例会は会員の参加によって成り立つイベントであり、参加者の積極的な関与によって会が盛り上がることになる。したがって、今後も会員の積極的な参加をお願いしたい。

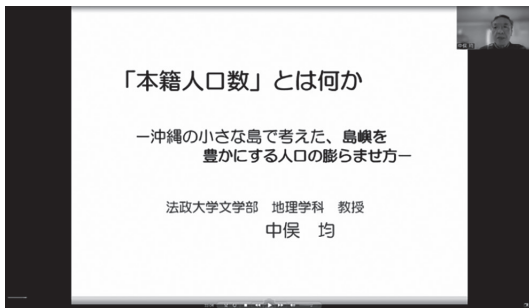


図1 中俣均氏による講演の様子

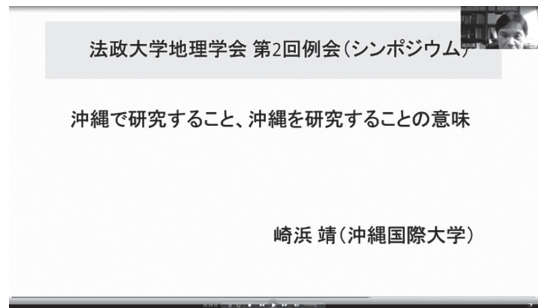


図4 崎浜靖氏による講演の様子

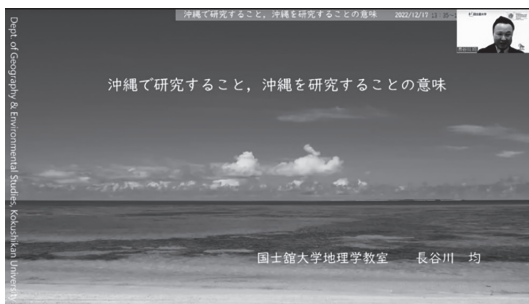


図2 長谷川均氏による講演の様子



図5 パネルディスカッションの様子



図3 柴田健氏による講演の様子